

昨年9月27・28日に行われた第21回男女平等推進フォーラムは大好評のうちを終了。特に28日に行われた小室淑恵さん(株式会社ワーク・ライフバランス代表取締役社長)の講演会には30・40代を中心に多くの方が来場。講演の中で小室さんは「私たち日本人は家庭や私生活を犠牲にして働いてばかり」「長時間労働なのに仕事の成果は最低クラス」「残業をしないようにするために個人がスキルアップし、働き方の見直しが必要」「私生活の充実によって、仕事の質や効率も高まる」と述べています。

この講座の参加者の中から台東区のパパお二人にご自身のワークライフバランス(以下、WLB)事情について聞いてみました。

～小室淑恵さんに聞いてみよう「仕事と暮らしの幸せな関係」を聞いて～

パパ達のワークライフバランス事情

(仕事と生活の調和)

多川 僕の場合、仕事は6時位には切り上げ、7時には帰宅しています。日本では仕事範囲が明確化していないので、効率よく自分の仕事を早く片付けると、別の仕事を次々と頼まれる。仕事範囲を明確化し、その対価(給与)の関係を数値化させ

●小室淑恵さんの講演会、いかがでしたか?

多川 小室さんの話を直接聞き、うんなるほどと思うことも多かったが、実際残業を少なくするという点については、僕としてはまだなかなか難しい部分もあるなと思いました。

石田 確かに難しい部分はあるとはいえ、前に進まないこと。小室さんの話の中で出てきた仕事の仕方、働き方、会社の組織のことなど具体的なものが良かったですね。僕も自分の時間の生産性をもっと考えなければと感じました。このところ仕事に時間をかけちゃって、時間で解決するようなところがありましたね。時間内の生産性が低かった。これは反省点ですね。まずは自分自身の時間内生産性をあげて仕事を早く切り上げるしかないと感じました。

多川 確かに時間をかければかけるほどその仕事の完成度は高くなり、その結果として、仕事の評価も高くなる。現在の評価のされ方はボーナスなら、半期(6か月)の最終結果で仕事の完成度・総量によって評価されるので、時間をかけた人が勝者になる。ゴールなきチキンレースをさせられていて、子育て世代で上を目指している人達は、みな、疲労困憊しています。だから、評価の仕方

を仕事の効率(生産性)に変える必要があると思います。その方が会社の経営の観点からも良いはずですよ。

●残業時間はどれくらい?

石田 時期にもよりますが、今頃は過酷ですね。会社からも早く帰るようにならなければならないけれど、だったら早く帰れるようにしてほしいと思いますね。上司がとても残業が多いんです。本当なら自分が申し出て、上司の仕事の負担を減らすべきなんだろうが、そうすると今度は自分の仕事量が増えてしまい、帰宅時間がますます遅くなる。結局、仕事と家庭の板挟みの状態です。

「ワークライフバランスに不満」

日本が1位、少子化にも反映?

WLBに不満をもつ人の割合は、日本が世界24カ国のうちで1番高い。これらの国々は、合計特殊出生率が1.3以下で、少子化の傾向が共通であり、WLBと少子化には相関関係がありそうです。

ワークライフバランスに満足していない割合

1	日本(16%)
2	オーストラリア(11%)
2	ロシア(11%)
4	カナダ(9%)
5	ギリシア(8%)
5	スペイン(8%)
7	米国(8%)
8	ドイツ(7%)
9	ポーランド(6%)
9	中国(6%)

国際労働機関・リサーチ・インスティテュートによる「仕事と家庭の調和(ワーク・ライフ・バランス)に関する世界意識調査2006年8月」より

仕事をしていても帰らなげやと思うけれど、帰れない。自分だけが定時に帰ったら、周りから浮いてしまいますしね。残業することに對しての罪悪感もある。罪悪感を抱えながら仕事をやってるのが日常です。妻が7時は魔の時間って言うています。子どもが騒ぐ中で食事をさせて、自分の時間はまったくなくて、子どもを寝かしつけてから自分の仕事を再開している。妻にもものすごく大変な思いをさせているとわかっているし、そこで自分が早く帰ってフォローできれば、家族の関係も変わっていくのは百も承知だけれど、帰れないというジレンマの日々。じゃあ、思い切って残業しないで帰ればいいのかも思うけど、なかなかそれもできない。そんな人はたくさんいるんじゃないかな。

れば、個人で就業がコントロールできると思っています。僕は上の子が11か月の時、1か月間育児をとったんです。その時、本当に子育てのつらさや大変さを痛感しました。だからその分、自分でできることは何でもやるうとしていきます。育児をとった時、同僚は好意的でしたが、直属の部長からの理解が得られず、最後まで認めてもらえませんでした。でも、強引にとっちゃいました。(笑)

●自分自身のWLBは?

石田 小室さんもおっしゃっていましたが、若い頃から地域活動をしていて、定年退職後、なかなか地域に溶け込めない。だから今は忙しくて、町会や台東パパコミュニティの活動をしています。子育て中のママにママ友が必要なように、パパにもパパ友が必要じゃないかと。

多川 ママでもママ友がない孤立化の問題があるけれど、パパにも同じことがいえる。

石田 そう考えて2年前に孤立するパパの連携を深め、ストレス解消の場として台東パパコミュニティを作りました。昨年秋に「たいとうパパスクール」(5回連続講座)を企画、1回目の講師にファザーリング・ジャパン(以下、FJ)代表の安藤哲也さんに講師に来ていただきました

た。安藤さんも子育て世代の父親に向けて、小室さんとはまた違った視点でWLBの話をしてくれました。

多川 WLBに対する社会の意識を変えるには、小室さんの考えは「国全体として今後、少子高齢化がどんどん進むと、日本社会が立ちいかなくなるという視点で、どうするべきか?」という制度からの変革と、安藤さんの「具体的にパパはどうするべきか?」という手法の両面からのアプローチが必要ですね。お上が変わればと言いますが、そういう点ではもっと行政が率先して男性の育児をとってほしいですね。一昨年度、台東区役所では男性で育児をとった人は二人だったそうです。

僕が育児をとった時、上司が認めてくれず、苦労しました。だから、FJが提唱している「笑っている父親を増やす」ためには、イクボス(男

性従業員や部下の育児参加に理解のある経営者や上司のこと)をもっと増やしてほしいです。だから今回のような講演は経営者や管理職の方にこそぜひ聞いていただきたい。そうすれば、男性の育児参加や地域活動に使える時間が増えて、日本のWLB満足度も上がると思いますね。

石田 WLBに関する意識を変えるのはなかなか難しく時間はかかると思いますが、このままだと日本は働き手が不足し、経済も破綻してしまいます。だから一人ひとりがこの問題を真剣に考えて、少しずつでも変えていかなければと思います。残業を減らして子どもが小さい頃から父親が家事や育児に参加していれば、それが当たり前になる。そして、地域のつながりも大切にして、子どもも大人も高齢者もみんなが笑顔で暮らせる社会にしていきたいですね。



とある
たがわ 多川 徹さん
台東区西浅草在住の40代。会社員。妻(育休中)と1歳と3歳の娘のパパ。台東パパコミュニティメンバー。

台東パパコミュニティとは

台東区を拠点にする、パパの、パパによる、家族のためのコミュニティ。一緒にパパから笑顔を広げよう。参加希望の方はホームページをご覧ください。

<http://taipapa.com/>



いしだ たかひろ
石田貴宏さん
台東区谷中在住の30代。会社員。妻(フリーライター)と2歳の娘と4歳の男児のパパ。台東パパコミュニティ代表。